博士学位論文全文の要約文

論文題目

ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題：
1990 年代アメリカ文学／グローバル・ポピュラー・カルチャーの一傾向

青木耕平

論文の構成

序章

ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題

1. 論じられる問いと、その問いに至った経緯
2. 本論における「1990 年代」の始まりと終わり
3. 本論が依拠する歴史記述
4. アメリカ作家たちの同時代性、そのポピュラリティ、その死をめぐって
5. 時代のオリジナリティーと、作品のオリジナリティー
6. 各章の概要
7. 1990 年代アメリカ（文学・言説）小史

第一章

キルゴア・トラウトの三度の埋葬：カート・ヴォネガット『タイムクエイク』と、「歴史の終わり？」論争

1. 1996 年、『タイムクエイク』の構造上の問題
2. 1991 年、歴史の終わり
3. 『タイムクエイク』における分裂と統合、そして反復の問題
4. 2001 年、キルゴア・トラウトの二度目の死
5. 2004 年、1990 年代小説として『タイムクエイク』を読む

第二章

第六巻の深淵：アーシュラ・K・ル＝グウィン＜アースシー＞第二の三部作と 1990s ジェンダー論争

1. 二つの三部作を持つファンタジー
2. 『テハヌー』、テナー、（ポスト）フェミニズム
3. 「アースシーを改訂する」――第二波フェミニズムとバックラッシュ
4. 承認か再分配か――『中断された正義』、「単に文化的な」

5. 『もう一つの風』――1990 年代を考える

第三章

ビリーはメキシコに行った：コーマック・マッカーシー＜国境三部作＞と北米自由貿易協定

1. 冷戦を語り直す三部作？
2. A Brief History of NAFTA and マッカーシー
3. ジョン・グレイディの物語
4. ビリー・パーハムの物語
5. 平原の町

第四章

トニ・モリスンの戦争：ビラヴド三部作梗概ノートを読む

1. ビラウド三部作、その謎
2. ビラヴド三部作構想、その全貌
3. 「ビラヴド三部作構想」と『ジャズ』、『パラダイス』との関係性
4. ビラヴドの消失
5. トニ・モリスンと、その時代
6. トニ・モリスンの戦争

第五章

もう一つの 1995 年：村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』三部作と歴史修正主義

1. ヴォネガット、ル=グウィン、マッカーシー、モリスン、そして村上
2. 『ねじまき鳥クロニクル』はいかにして読まれてきたか
3. クロニクル・オブ・『ねじまき鳥クロニクル』三部作
4. 作家の饒舌、語りの混乱
5. ポスト冷戦小説として「第 3 部 鳥刺し男編」を読む
6. もう一つの 1995 年：村上春樹と「マルコ・ポーロ事件」
7. グローバル・ポピュラー・カルチャー化する村上と、そのねじれ

終章

＜帝国＞の出現と挫折

1. ここまでのまとめ
2. 『＜帝国＞』はどこで書かれたのか
3. ＜帝国＞三部作は、「建て増し」されたのか？
4. 同時代に幻想を抱き続けるということ

5. 終わりに

註
引用文献
謝辞

各章の要約

序章：
ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題

本博士論文は、1990 年代にアメリカ合衆国を中心として書かれた文学作品ないし理論書が、その成立過程においてそれぞれ類例を見ない特異な変容を遂げていることに着目し、時代や状況がいかにテクストに影響を及ぼすのか論じたものである。そして、それらが共通して有する特徴が、1990 年代文化の一傾向を表していることを明らかとすることを目指して書かれた。

序章ではまず論述対象となる「1990 年代」という年代の厳格化を行なった。先行するアメリカ文化研究に則し、本論では「1990 年代」の開始を 1989 年 11 月 9 日のベルリンの壁の崩壊とし、その終点を 2001 年 9 月 11 日の世界貿易センタービルの崩落までとした。それはつまり、「冷戦」の終わりにして「新世界秩序」という言葉が聞かれたアメリカ中心のグローバリズムの時代である。

次いで、本論で中心的に扱う作家、作品とその刊行年の一覧を示し、それらが共通して持つ特異な要素を指摘した：

1. カート・ヴォネガット『タイムクエイク』（Kurt Vonnegut. *Timequake*, 1997）

2. アーシュラ・K・ル＝グウィン＜アースシー第二の三部作＞『テハヌー』、「ドラゴンフライ」、『もう一つの風』（Ursula K. Le Guin's "The Second Trilogy of Earthsea." *Tehanu*, 1990; "Dragonfly," 1998; *The Other Wind*, 2001）

3. コーマック・マッカーシー＜国境三部作＞『すべての美しい馬』、『越境』、『平原の

街』（Cormac McCarthy's "The Border Trilogy." *All the Pretty Horses*, 1992; *The Crossing*, 1994; *City of Plains*, 1998）

4. トニ・モリスン＜ビラヴド三部作＞『ビラヴド』、『ジャズ』、『パラダイス』（Toni Morrison's "The Beloved Trilogy." *Beloved*, 1987; *Jazz,* 1992; *Paradise*, 1997）
5. 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』、「第 1 部 泥棒かささぎ編」1994 年、「第 2 部 予言する鳥編」1994 年、「第 3 部 鳥刺し男編」1995 年
6. マイケル・ハート ＆ アントニオ・ネグリ＜帝国三部作＞『帝国』、『マルチチュード』、『コモンウェルス』（Michael Hardt and Antonio Negri's "Empire Trilogy." *Empire*, 2000; *Multitude*, 2004; *Commonwealth*, 2009）

これらの作品は、以下の 8 つの項目のそれぞれ大半を有している。

① 1990 年代に執筆／刊行された作品である

② 三部作である、もしくは他作品からの続きである

③ 完結または完成していた作品が分裂する

④ 後年、「建て増し」される

⑤ 冷戦期に多くの作品を発表し評価を確立したキャノン作家たちである

⑥ 英語圏のみならずグローバルに読まれているポピュラーな作品である

⑦ 初発の計画を超え、後年になって主要登場人物の最後が描かれる

⑧　911 同時多発テロまたはそれ以降の国際情勢の変化が、作品の枠組み（または

その解釈）に大きな変化をもたらすこととなった

この上記八つの特徴が、すべて「テクストの外側」にあること、つまり直接的な作品内容の相似の指摘ではないことを明らかとした上で、これらの共通項こそが三浦玲一が『村上春樹とポストモダン・ジャパン』のなかで「グローバル・ポピュラー・カルチャー」と呼んだグローバリズム時代にポピュラリティーを獲得したナショナルな枠に収まらない文化作品がもつ一傾向なのではないか、と本論全体の仮説を提示したのち、各章の概要を記した（各章の内容は以下にそれぞれ要約を付したのでここでは省略）。

序章でおこなった最も重要な作業、それは、本論それ自体のメタナラティヴを提示したことである。一見して内容もイデオロギーも美学もジャンルや書き手のアイデンティティーさえもバラバラの各作品が、その枠組みと成り立ちに着目する時、奇妙な程に似通ってしまっている、そしてそれが 1990 年代の（ポスト冷戦グローバリズムの）時代精神の一つの形だ、というのが要諦だ。

序章の最後に付したのは、文学研究・文化研究の領域においてなぜ「1990 年代」が問題となるのかという問いの整理である。アメリカ本国または日本のアメリカ文学研究において、「冷戦期研究」は多くの蓄積を有している。「ポスト 911 小説研究」はすでに研究の一領野として確立されている。それらに比して、冷戦体制崩壊から 911 勃発に挟まれた 1990 年代は、大きな研究の視座が未だ与えられていない。たとえばハーバード大学が編纂した 2009 年刊行の『新編アメリカ文学史』（*A New Literary History of America*）では、アメリカ建国以降の文学史が時系列ごとで並べられているが、そのなかで最もページ数が薄いのが 1990 年代である。分量で言えば、前後して挟む 1980 年代と 2000 年代の 5 分の 1 程度しかない。まるで、アメリカ文学にとって、1990 年代に特筆すべき作品や事柄は存在しなかったかの

ようだ。

しかし、1990 年代アメリカ文学は、決して不作だったわけではない。多文化主義が隆盛し、多くの非白人作家が頭角を現し、クィアスタディーズが開始され、若い作家たちはポストモダン文学を乗り越えようと新たな文学潮流を起こし、すでに揺るがぬ地位を確立していた大御所達が歴史に向かう大作を次々に発表した。だがしかし、それではなぜ、これほどまでに 1990 年代は軽視されているのか？

2021 年[博士論文提出時]の現在、我々が直面しているのは、EU の苦境、ロシアの軍事的台頭、資本主義世界におけるアジア諸国の勢力図の変化、貧富の差の増大、ナショナリズムの勃興、中東問題の激化、保護主義の復古である。そしてこれらは往々にしてグローバリゼーションの帰結／バックラッシュとして理解され、そのアイコンとしてアメリカ合衆国大統領ドナルド・トランプがいる。そしてトランプは、2016 年大統領選の最中に、1990 年代米国クリントン政権を攻撃した、「我々の苦境をもたらしたのは、1990 年代のグローバリゼーションだ」と。いったいなぜアメリカ国民は、そして西側資本主義国家に生きる我々は、彼のこの告発に一定のリアリティを感じ取ってしまったのだろうか。我々の現在を深く規定することとなった 1990 年代を知るためにこそ、1990 年代のテクストは読み解かれなければならない。

アメリカでは、多文化主義、ジェンダーやポストモダン作品分析等の枠組みで書かれた 1990 年代文学論は 2020 年時点で 4 冊存在し、1990 年代作品論集も代表的なものが数冊編まれており、どれも大変優れているが、階級の視座と、「現在に連なる 90 年代」というマクロな視点が存在しない。様々な学問分野で 1990 年代の再検討がなされている中、文学／文化もまた現在へと続く歴史の中で捉え直すことが求められている。今までの文学研究の権威が軽視してきた 1990 年代の合衆国文学を再読し、文学史に加筆修正を加えることが、本博士論文の意義であり目的である。

第一章：キルゴア・トラウトの三度の埋葬
カート・ヴォネガット『タイムクエイク』と、「歴史の終わり？」論争

第一章は、1997 年に刊行されたカート・ヴォネガット最後の長編小説『タイムクエイク』を、冷戦崩壊後の言説から読み解くものである。ヴォネガットは序文で刊行直前にそれまでの完成稿を破棄、断片化してエッセンスのみを抽出し、それに直近のエッセイを組み合わせたのだと『タイムクエイク』完成経緯を読者に提示する。その破棄された小説のメインプロットは、2001 年 2 月 13 日に発生した時震(タイムクエイク)によって、全世界の人間が 1991 年 2 月 17 日に連れ戻され、自由意志を奪われた状態で再度まったく同じ十年間を過ごさなければならない、というものだった。多くのタイムトラベル SF や過去改編小説と異なり、『タイムクエイク』における繰り返しの十年では、一切の現実改編可能性が奪われている。

1991 年とは冷戦崩壊後のアメリカであり、「歴史の終わり」言説やグローバル資本主義が世界中を覆っていた時期であった。破棄された小説は同時期の支配的な言説をパロディー化し批判するものであったが、同時にそれを「失敗作」であると断ずるところに、大恐慌時代を経験し社会主義に肯定的な発言を冷戦期において繰り返したヴォネガットいう作家の時代的な限界と、その誠実さがある。

第二章：第六巻の深淵
アーシュラ・K・ル＝グウィン＜アースシー＞第二の三部作と 1990s ジェンダー論争

第二章は、第二波フェミニズムの達成を受けアーシュラ・K・ル=グウィンが 1990 年以降に新たに著した＜アースシー（ゲド戦記）＞“ 第二の三部作 ”におけるジェンダー・ポリティクスを考察する。多くの先行研究は第 4 巻『テハヌー』をフェミニズムの達成であると論じるが、現在から眺め直したときすでにポストフェミニズムの問題が色濃く反映されている。ここで一度ル=グウィンはシリーズ終結を宣言するが、同時期の合衆国ではジュディス・バトラーによってクィア理論が隆盛し、ナンシー・フレイザーがそれを「再分配を忘れた承認の政治」と批判するなどジェンダー・ポリティクスが揺れた時代でもあった。ル=グウィンはこの論争に答えるかのように ＜アースシー＞の続編『アースシーの物語』『もう一つの風』を 2001 年に刊行、作品内にクィア理論とグローバル資本主義批判を取り入れてみせるが、それは同時に新自由主義の外部を描くラディカルな想像力であった。

第三章：ビリーはメキシコに行った
コーマック・マッカーシー＜国境三部作＞と北米自由貿易協定

第三章はコーマック・マッカーシーの「国境三部作」（“The Border Trilogy”）について論じた。『すべての美しい馬』（1992）、『越境』（1994）、『平原の町』（1998）は、刊行した当時から批評家より高く評価され、商業的にも大きく成功し、現在に至るまでアカデミアでも数多くの研究が書かれ続けている、紛れもなく 1990 年代アメリカ文学を代表する三部作である。しかし、これら三つの小説は、その初めから三部作として構想されたものではなかった。寡黙にして自作解題を行わない著者であるが、2010 年以降にテキサス大学に納められ研究者に公開されることとなったマッカーシーの直筆原稿を読み解く中で、あらたな研究視座が与えられている。その一つとして、三部作を締めくくる最終作『平原の町』原案が最も早く 1980 年代に完成していた、という事実が三部作読解に新たな展開をもたらすこととなった。博論執筆者もこの最新の資料調査をもとに 2018 年にテキサス大学を訪れた。本章はその研究成果であると同時に、三部作を三部作として構想した時代的要請・必然を北米自

由貿易協定（NAFTA）と刊行経緯の奇妙な一致に探り、三部作の政治的無意識を明らかが同時代のニュー・エコノミーと合致していることを明らかとした。

第四章：トニ・モリスンの戦争
ビラヴド三部作梗概ノートを読む

第四章はトニ・モリスン「ビラヴド三部作」を論じた。1987 年発表の『ビラヴド』、1992 年の『ジャズ』、そして 1998 年刊行の『パラダイス』は、それぞれが独立し完結した長編小説であるにも関わらず、著者モリスン自らは「ビラヴド三部作」と呼んで括った。しかし長年、それが三部作であることの必然性は著者モリスンがそう呼んでいるから、という以上になんの妥当性もなく、アカデミアの世界においても著者の発言を唯一の審級として研究がなされてきた。そのような状況が 2016 年、プリンストン大学にて直筆史料が公開されたことで一変した。本章は論者が直接プリンストンに赴いて長年封印されてきた「ビラブド三部作構想ノート」を詳述したものである。そのノートによれば、本来はこれら三冊全ての主人公がビラブドとなるはずで、この三冊の繋がりはあまりにも明白だった。しかし、実際のところビラヴドは『ビラヴド』終盤でテキストから消失し、後続二作品に現れることがなかった。ビラヴドが消失することとなった時点を『ビラヴド』草稿と決定稿とを比較して明らかとしたのち、『ジャズ』『パラダイス』にその残響が聴けることを読み解きつつ、「構想ノート」と大幅に変わってしまった『パラダイス』の原題が“War”だったことから、ビラヴド三部作と文化戦争の 90 年代文学史を描いた。

第五章：もう一つの 1995 年
村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』三部作と歴史修正主義

本章では村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』三部作（1994, 1994, 1995）を扱った。本章は大きく分けて二つのパートから成り立っている。まず前半で行ったのは、ここまで論じてきたアメリカ人作家そしてアメリカ文学と、日本人である村上が日本語で執筆した本作を同じ土俵に載せて分析することが恣意的ではなく必然であることの論証である。ヴォネガットからの多大な影響、ル=グウィン翻訳者としての村上、同時代に意識する数少ない同年代作家としてのマッカーシー、執筆時に同じキャンパスに滞在していたモリスン。そして実際に作品テキストを用いて、『ねじまき鳥』がいかに今までの作品と同じ構造を有しているかを明らかとした。

後半は『ねじまき鳥クロニクル』自体の成立経緯の分析である。文芸評論家・加藤典洋の「建て増し」という概念を批判的に継承しつつ、最初の二冊と第 3 部との間に開いた亀裂

を日本語オリジナルテクストより読み込んで、それをグローバルな俎上に載せて「冷戦」から「ポスト冷戦」への飛躍と破綻が生じており、この歪みこそが 1990 年代ポスト冷戦期の日本そして東アジア情勢の正しい表象たりえていることを論じた。

終章：＜帝国＞の出現と挫折

第五章まで小説作品を中心に置き、それと併置する形で同時代言説を検討してきたが、最終章ではそれまでに論じた小説テクストを併置し直す形で、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『＜帝国＞』を論じた。『＜帝国＞』もまた、後に＜帝国＞三部作となる最初の一冊であったが、その実は 1990 年代という時代に深く結びついており、911 テロ以降に過度な意味付けをされてしまった本書を、1990 年代の文脈で読みなおすことで再確認した。

本章後半では本博士論文全体の総括を行なった。本論は二つの歴史学的視点、すなわち同時代の「幻想」と、確定したものとしての「過去」という面から、言説であり想像力の結晶であるがゆえ「幻想」ともテクストはなりうるものとし、かた一方で、それは書かれた時代に深く規定された史料としての「過去」であり、その幻想の失効も描いた。それがヴォネガットの場合はトラウトの三度目の死であり、ル=グウィンの場合は三度目のシリーズ再起動であり、マッカーシーの国境へのオブセッション、モリスンの少女ビラヴドへの思い、村上の『1Q84』での 1984 年再設定、ネグリ・ハートの＜帝国＞三部作への発展であった。本論はその「1990 年代」の終わりを 2001 年 9 月に定めたが、実際はそこで綺麗に終わるようなものではなかったことが明らかとなった。しかし、その限界を示したことが、1990 年代という激動の十年の一端を描いたものであり、それまでぼやけていた「一傾向」の輪郭を少しばかり明瞭にしたことが、本博士論文の学術的な達成である。